

学・会・近・況

日本南アジア学会 第22回全国大会プログラム

2009年10月3日(土)、4日(日) 北九州市立大学本館4階

日程

第1日 10月3日

12時20分～ 参加受付

13時00分～15時00分 **セッション1 自由論題分科会1、2、3**

分科会1 経済学系 (D-401 教室)

分科会2 政治学・歴史学系 (D-402 教室)

分科会3 人類学、社会学など (D-403 教室)

15時00分～15時15分 休憩

15時15分～17時15分 **セッション2 自由論題分科会4**

テーマ別発表1、2

分科会4 宗教学・言語学・インド学など (D-401 教室)

テーマ別1 変動する社会と「教育の時代」

代表者：押川文子 (D-402 教室)

テーマ別2 インド近現代史における社会運動—
その共通性をめぐって—

代表者：石坂晋哉 (D-403 教室)

17時30分～18時15分 **総会** (C-401 教室)

18時30分～19時30分 **懇親会** (厚生会館2階)

第2日 10月4日

9時30分～12時00分 セッション3 テーマ別発表3、4、5

- テーマ別3 「南アジア」の「労働移動」で採択された
「ニーズ対応型地域研究」を考える 代
表者：山本真弓（D-401 教室）
- テーマ別4 消費パターンの長期変動と社会構造・
社会意識—南インド村落調査と雑誌・
新聞広告の分析を中心に—
代表者：柳澤悠（D-402 教室）
- テーマ別5 歴史における文学的教養
代表者：水野善文（D-403 教室）

12時00分～13時00分 昼食休憩

13時00分～16時00分 全体シンポジウム

ともに考えよう！ 南アジアの伝え方・教え方
小島眞、中里亜夫、三輪博樹、山下博司、八木祐子、田辺明生、
長崎暢子（C-401 教室）
終了後閉会

※ビデオセッション「人びとのニルバチョン—2008年バングラデシュ総選挙—」が
適宜、開催されます（C-403 教室）

※エクスカーショーン 希望者を福岡アジア美術館による「福岡アジア美術トリエン
ナーレ2009」（福岡市）にご案内いたします。

発表内容（分科会は報告15分、質疑5分）

第1日 セッション1 自由論題分科会

分科会1

経済学系 司会：宇佐美好文・山本盤男

福味敦

インドにおける電力補助金と州財政赤字問題

嶋田晴行

アフガニスタン財政の脆弱性—自立への課題—

森田剛光

モータリゼーションの進展とネパールのトレッキング・ツーリズム
—カリガンダキ渓谷地域—

渡部瑞希

カトマンズの観光市場およびローカル市場の形成過程と現状

加藤眞理子

移住労働および私的送金動機の階層分析—1990年代インドの事例から—

分科会2

政治学・歴史学系 司会：近藤則夫・長島弘

奥埜梨恵

インド・パキスタン独立後のデリーにおけるムスリム避難民の事例

井坂理穂

1950年代のインドにおける言語州問題—グジャラート州の成立過程—

太田信宏

19世紀初頭マイソール藩王国の地方統治体制とその歴史的起源

油井美春

現代インドにおけるコミュナル暴動の予防活動

—マハーラーシュトラ州の地域共同委員会の事例から—

湊一樹

投票行動の地域的差異とその要因

—1957-69年のウッタル・プラデーシュ州の事例—

M. B. Alam,

'A Critical Study of Japan-India Relations: Towards a New Architecture'

分科会3

人類学・社会学など 司会：赤井ひさ子・喜多村百合

宮本万里

環境にやさしい勤勉な身体へ向けて

—プータンの国立公園に生きる焼畑耕作民とチャン—

松川恭子

インドにおける近代演劇の地域的展開

—ゴア州の大衆劇ティアトルを事例として—

脇田道子

エスニック・ドレスが表象するもの、隠すもの

—インド、アルナーチャル・プラデーシュ州のモンパの事例から—

竹内愛

女性自助組織によるネワール社会のカースト間・カースト内関係及びその変化

飯田玲子

インド・マハーラーシュトラ州におけるタマーシャー劇の現代の変容

—民俗芸能から公共文化へ—

セッション2 自由論題分科会・テーマ別発表

分科会4 宗教・言語・インド学など 司会：五十嵐理奈・片岡啓

平野久仁子

万国宗教会議(1893年)以降のヴィヴェーカーナンダ

—インドでの新聞報道をめぐる—

堀田みどり

ニシュカーマ・カルマの可能性

今村泰也

ヒンディー語のいわゆる接辞 -valā の形態論的位置付け

石崎貴比古

『印度蔵志』における平田篤胤のインド表象

小尾淳

南インド現代社会におけるアーラーダナー現象の考察

―ナーラーヤナ・ティールタ・アーラーダナーの事例を中心に―

北田信

千年前の歌声

―新期インド・アーリア語の修行歌集とカトマンドウの口承伝統―

テーマ別発表1 変動する社会と「教育の時代」

代表者：押川文子 発表者：小原優貴、日下部達哉、
南出和余、針塚瑞樹

趣旨：現代の南アジア社会では、各地に様々な学校が出来、それに伴う「学校選択」が激化している。一方で、人口の大半を占める農村部や貧困層では、未だ学校普及の課題があることも事実である。この状況下で私立学校やNGO学校、宗教学校等の担い手の多様化は、従来の「国民国家型教育」ではすでに説明がつかなくなっている。こうした複合的システムの背景には、変動する社会における教育に対するニーズ多様化があることは言うまでもない。空間的にも階層的にも人の移動が激化する現代において、教育は新たな機会を生み出す可能性を帯びた「資格」として求められ、教育のモビリティが絶えず変化する形で求められている。本分科会では、各発表者が多様化する教育システムの各部についてインドとバングラデシュの事例から発表し、それを全体の大きな「教育システム」のなかに位置づけることを目指す。今、人々は教育という資本を武器に、何を目指しているのだろうか。現代南アジアにおける教育の意義について、分科会参加者とともに考えてみたい。

テーマ別発表2 インド近現代史における社会運動 ―その共通性をめぐって―

代表者：石坂晋哉 発表者：小嶋常喜、木村真喜子、船橋健太
コメンテータ：田辺明生

趣旨：これまでのインド社会運動研究は、1947年以前の運動を扱う歴史学的な研究と、それ以後の運動を扱う政治学者や社会学者による研究とに分断され、両者の交流が乏しかった。さらに独立後60年以上を経て各運動の目的や担い手は多様化し、それにともなって社会運動研究もますます専門化・細分化が進展している。多くの詳細な個別事例研究がなされる一方で、近現代インド史の流れとの関係のなかでそれら

を理解しようとする試みはほとんどなされてこなかった。それに対し本セッションではまず、20世紀以降のインドにおけるさまざまな社会運動について各報告者が各時代の社会・政治・経済的背景を踏まえた事例分析を行う。そのうえで、それらをつき合わせて比較の観点から議論するなかから、一方において近現代インド社会運動の通時的な共通の性格を抽出すると同時に、他方では各時代に固有の特徴をもあらためて浮き彫りにすることをめざす。

なお本セッションでは、社会運動を「現状への不満や予想される事態に関する不満にもとづいてなされる変革志向的な集合行為」とする社会学者・長谷川公一の定義を採用し、主に①運動に参加する人々の動機づけ、②運動の志向する目標や価値、③運動の集合的な行為の形態、に焦点を当てて分析を行う。

第2日 セッション3 テーマ別発表

テーマ別発表3 「南アジア」の「労働移動」で採択された「ニーズ対応型地域研究」を考える

代表者：山本真弓 発表者：荒木一視、稲葉奈々子、
高田峰夫、三宅博之、山本真弓

趣旨：平成19年度に山口大学が2年間の予定で採択された「ニーズ対応型地域研究推進事業」のテーマは、「バングラデシュの社会経済的格差と労働移動に関する実証的研究」というものであったが、その内容は計画段階から実施段階にかけて大きく変更しなければならなかった。その過程を通して、そもそも人文社会科学の地域研究におけるニーズ対応型とは何なのかを考えさせられる場面が多かった。そこで、今回の発表ではまず、プロジェクトの採択から実施に至る経緯を簡単に説明し（山本）、次に研究内容の報告を行い（荒木、高田、三宅、山本）、最後に「ニーズ対応型地域研究」の問題点を明らかにしたい。具体的には、当初計画にあったバングラデシュ国内の労働移動から日本への移動に焦点を変えた経緯と、個々の報告としては日本への移動が多い村の世帯調査をベースに、日本からの帰国者と在日バングラデシュ人の聞き取り調査、エスニックマガジン分析、入管政策の比較軸として取り上げた在韓バングラデシュ人調査の報告を行う。

テーマ別発表4 消費パターンの長期変動と社会構造・社会意識

—南インド村落調査と雑誌・新聞広告の分析を中心に—
代表者：柳澤悠 発表者：中村尚司、杉本星子、栗屋利江、
井上貴子、Anandhi. Shanmugasundaram、柳澤悠 司会・
コメント：杉本良男

趣旨：南インドの事例を中心にして、長期にわたる消費パターンの変化を、社会経済構造や人々の社会的意識の変動と関連させながら、検討する。南インド村落では過去数十年に、耐久消費財や衣料品など消費生活の面や、教育や巡礼への参加階層など、多様な面での変化が生じた。それらには、経済的な変化だけでなく村落内外の社会関係の変化も関連している。中村尚司・柳澤悠・杉本星子の3名は、数十年にわたる調査に基づき、消費変動を村落社会内外の社会変動と関連させて考察する。より長期の消費パターンの変動をたどるために、マラヤーラム語雑誌の広告等の分析により第一次大戦以降の時期の初期消費文化を考察し（栗屋利江）、タミル語雑誌の広告分析から企業の広告戦略と消費との関係を考察する（井上貴子）。Anandhi 博士（マドラス開発研究所）は、ジェンダーの視点から消費・商品と社会意識の関連を考察する。

テーマ別発表5 歴史における文学的教養とその場

代表者：水野善文 発表者：北田信、坂田貞二、松村耕光、松木園久子
コメンテータ：太田信宏 コーディネータならびに司会：臼田雅之

趣旨：本セッションでは、「文学史」叙述へ向かう道程の一つとして、文学が成立する（制作され、受容され、伝達される）場と、場を成り立たせている文学的教養がどんなあり方をしていたかを問題にしてみたい。場の問題として問うことは、文学を自閉的なジャンルではなく、人間のさまざまな営みが交錯する場としてとらえようとすることを意味する。一方、文学的教養を問うことは、作者と読者で構成される文学が固有のジャンルであり、それが人々の生を表現し規定する形式の一つであることから、文明のあり方を認識するために不可欠な分野であることを意味する。同時に、歴史の変革期のダイナミクスのなかで、文学がどのようにふるまい、また現在に残る「文学作品」から何が読み取れるかを検討してみたい。

■全体シンポジウム ともに考えよう！ 南アジアの伝え方・教え方

趣旨説明（5分）：三宅博之 パネラー（各15分）：小島眞（経済学）、中里亜夫（地理学・開発教育）、三輪博樹（政治学）、八木祐子（ジェンダー論・文化人類学）、山下博司（言語文化・宗教史）コメンテータ（各10分）：田辺明生、長崎暢子 司会：石上悦朗、喜多村百合

趣旨：南アジアを伝える際、一般的に、その多様性が強調され、多様さ、複雑さ、広がりを持った南アジアが語られる。しかし、それらの情報のなかには、様々な人たちが、少しの間のインドの旅を通して得られた限られた観察・体験をもとに、インド世界を語っているものも少なくない。同時に、南アジアというと「貧困」、「社会開発の

遅れ」、「自然災害」、「コミューナル対立」、「パキスタンやインドでのテロ事件」といった事象に代表されるように、ネガティブなイメージが脳裏に焼き付けられることが多い。それらをもとに問題指摘型の伝え方・教え方が一般的だった。たとえ、ポジティブなイメージに連動するとしても、それらの事象は「算数が得意」、「ITを中心とした産業発展」など一面的、部分的なものが多かった。今回のシンポジウムは上記とは異なる方向性で進めていきたい。つまり、各パネラーの個人的な教育的経験に照合しつつ（自らの伝え方・教授法も紹介・振り返りつつ）、地域研究者として南アジア（インド）から日本が学ぶべきものがあるのか、あるとしたら、どのようなものなのか、さらにはどのように学べばいいのかといったことを探し出し、研究者、学会としての確に把握・発信することを目的としている。可能であれば、南アジアが持っている積極的な側面、ともに学究すべき事柄を各パネラーに出してもらい、それらを現在、将来的に日本と南アジア間の全体的な交流や協力につなぐことを展望したい。